此の館内に陳列してある重なるものは十七世紀頃から今日に至る迄の純粋なる露西亞の繪畫であつて、階上階下の二十七かの室は悉く之で充たされて居る、それで露西亞の繪畫を研究しやうとするものは是非とも此の博物館と今一つモスクワで有名なトレチヤコフ繪畫館とについてせねばならぬといはれて居る、一體露西亞の畫といふものは此の道には極めて疎い自分にも直ちに觀取せられる程、西歐諸國の繪畫とは趣を異にせるもので、題材に於ても宗教畫とか戰爭畫かが重なるものになつて居り、その宗教畫にしても天國の光明暉々たる有樣よりも、神罰を蒙つて苦艱の淵に陷つて居るやうなのが多いやうである、名物の雪と森とか牧場とかの類を描いた風景畫にしても、どこやらに陰鬱な氣分が現はれて居つて、明るい、晴れやかな、のび〳〵した有樣のものはとんと認められない、これは露西亞の國民性とか自然界とかゞ齎らす自然の結果に外ならぬのであらう、名高いペレス・チャギンがかいた我が日光とか長崎あたりの小品も見かけたが、どこやらに暗い筆つきは離れぬにしても、これらには流石に此の人の作として有名な髑髏の岡と積み重つて居る上を飢えた鷲が啄きまはして居る畫に認める樣な悽慘な氣分は漂うて居なかつた。

人種博物館

此のアレキサンダー三世博物館の東北の袖を成して居る宏大な一棟はまだ公開されては居なかつたが人種博物館にあてられてあつて、既に設備も殆んど完成せられてあつた、此の部の部長をして居られるのは、これも今度太公殿下の御一行中の一人として今日入京の筈なるマグイランスキー氏で、其の下に主事やそれ〴〵の係りの人々が頻